THE DAILY NEWS
KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS
Wed 22 May
DAY 6
Japanese

Yesterday's Highlight

レーサー（競技用車いす）の競演

大会5日目、快晴のユニバー競技場には多くの学校観戦会の児童・生徒も詰め掛け大声援が響き渡った。脳原性まひなどのクラスT37女子100mで中国のシャオヤン・ウェンが12秒27で、ひざ下の機能障がいなどのクラスF44男子やり投げでスリランカのズラン・コジツワクが66m49で、それぞれ世界新記録を樹立。ほかにも大陸新記録が多数誕生した。この日、日本は、トラック種目で銀メダル2個、銅メダル3個を獲得した。

■T52男子400m

日本の佐藤友祈は、2015年ドーハで開催された世界選手権に初出場し、車いすT52クラスの400mで金メダルを獲得。東京パラリンピックでは他を寄せ付けない走りで400m、1500mの２冠を達成した。このクラスの日本を代表する王者である。

ところが、昨年のパリ大会400mにベルギーのマクシム・カラバンが出場すると、王者に2秒以上の差をつけて優勝。さらに、今年2月には、カラバンは400mで52秒00の世界新記録を樹立した。今大会で佐藤は王位を奪還するのか。23歳の若きヒーローが、世界選手権2連覇を果たすのか。T52男子400m決勝は、注目の１戦だった。

前日に行われた予選では、佐藤は１組、カラバンは２組、各組の1位で決勝進出を決めている。カラバンの予選タイムは52秒50で、これは大会新記録だった。
決勝で、スタート直後から、カラバンは早いピッチでぐんぐん加速する。佐藤より１レーンイン側からスルスルと前に出ていくと、バックストレートで一人飛び出し、佐藤が追う展開に。その差を広げながら、カラバンがゴールした。予選よりタイムを落としたが、記録は53秒06。2位でゴールした佐藤のタイムは57秒98。5秒近い大差での圧勝だった。

実は、佐藤は今大会で思わぬアクシデントに見舞われていた。輸送中の事故で、新たに調整してきたレーサー（競技用車いす）が破損してしまったのである。フレームが完全に折れたため、急遽、東京パラリンピックで使用していた古いレーサーを取り寄せ、レースに出場した。
「トラブルからわずかな時間で、なんとかレースに対応できるように調整して臨んだ。決してベストではない中で、予選タイム57秒を出したことは評価できると思っています」（佐藤）

とはいえ、圧倒的な力を見せつけたカラバンの走りは、まさに超人的である。前回パリ大会の400mではカラバンと佐藤のタイム差は2秒。1年も経たずに、その差が5秒に広がったのだ。

「決勝のレースでは強い向かい風が吹いていて、トップスピードに乗せるのが難しかった。今回は、記録よりタイトルを重視していたから、それを実現できたことが何より嬉しい」と、カラバンはレースを振り返った。
昨年のパリ大会優勝から、世界記録の更新、そして大会2連覇と破竹の勢いである。
「かつてハンドボールの選手としてプレーをしていた経験がある。レーサーに必要な腕と肩の筋肉や使い方をすでに持っているのが強み。佐藤友祈選手のような素晴らしいアスリートと真剣勝負の場があること、そこに向けてトレーニングを積むこと。それが、僕のモチベーションであり、強さの理由です」と、語った。

障がいを負ってから、カラバンは水泳などさまざまなスポーツを試したが、いずれも興味を感じられなかったという。陸上競技で出会ったレーサーに乗り込むことで、風を感じ、自由とスピードを手に入れられる。「それが、陸上競技の最大の魅力です」。
レーサーのカーボンファイバー製のフレームは、カラバンにとって、「新しい脚」なのだという。「自由とスピードをくれる新たな脚を、僕はとても気に入っています」。

カラバンにとっては初出場となるパリパラリンピック。「もちろん、世界記録を出すのにふさわしい場ではある。でも、パラリンピックでは金メダルを獲得することが重要だ。その時の調子が良ければ、世界記録への挑戦もすることになると思う」。

パリパラリンピックには、佐藤も新たなレーサーを整え、万全のコンディションで臨むという。カラバンと佐藤の、真の一騎打ちは、パリパラリンピックに持ち越される。

この日の決勝には、日本から佐藤のほか、伊藤竜也、上与那原寛和が出場し、伊藤が1分01秒32で銅メダルを獲得した。

■T34女子100m

脳原性まひなどでレーサー（競技用車いす）を使うクラスT34の女子100mは21日モーニングセッションで5選手ずつ2組に分かれて予選が行われ、勝ち上がった8選手がイブニングセッションでの決勝に出場した。この種目（16秒31）を含む5種目の世界記録をもつイギリスのハナ・コックロフトが16秒89で大会連覇を飾った。

号砲から飛び出すと、後続を2秒以上も引き離してフィニッシュ。予選でも16秒67の大会新記録をマークするなど他を圧倒した。世界選手権でつかんだ通算15個目の金メダル。それでも、口にしたのは危機感だった。

「ホッとしました。メジャー大会に臨むたびにはいつも、この言葉を口にしてしまう。勝ち続けるのはだんだん難しくなっているからです。新しい選手もたくさん出てきているので気が抜けません」

実際、18秒90で2位に入った中国のハニュ・ランは16歳、19秒15で3位となった小野寺萌恵は20歳だ。

「この先数年で、この差をアッという間に縮める選手が出てくると思う。この大会には出ていないけれど、ライバル筆頭はチームメイトのカレ・アデネガン。それに、今日初めて見た中国の選手。萌恵には去年パリ大会で初めて会ったけれど、すごく上達していた。みんな若いから伸びしろも大きいので、うかうかしていられません」

アデネガンは23歳だが、東京パラリンピックと前回大会では2種目（100m、800m）でコックロフトに次ぐ銀メダルを獲得。確実に迫ってきてはいる。

小野寺は昨年5月に18秒46で日本記録を更新。前回パリ大会の5位から、今大会で初の銅メダル獲得と躍進した。決勝ではスタートの出遅れが響き、自身の目標だった2位以内も18秒台もかなわず、「いろいろ考えすぎてミスをした。悔しいです」と唇をかんだ。だが、負けず嫌いで芯の強さをもつ小野寺もまた、今は憧れのコックロフトに、いつか追いつき追い越したいと練習に取り組んでいる。

もちろん、コックロフトもまだその座を明け渡すつもりはない。練習では男子選手と競うなど自身を高める努力を積み重ね、今季はレーサーもより速さにこだわったモデルに新調。5カ月ほどかけて調整し、手応えも感じているという。

「私だって、まだ31歳。学ぶことはたくさんあるし、破るべき壁もある。100mで16秒を切りたいし、どこまで速くなれるのか興味深いです。レースに出ることが大好きだし、できる限りスタートラインに立ち続けたい」

絶対王者と新星たちの熱いレースから、目が離せそうにない。

なお、日本の吉田彩乃は19秒85で5位、北浦春香は20秒02で6位だった。

GO KOBE 2024!

サステナブルな取り組みを
神戸2024世界パラ陸上から

神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会では、競技場周辺で、スポンサー企業によるSDGsやダイバーシティの取り組みを体感することができる。

■ CO2を食べる自販機でドリンクを買おう

競技場エントランスを抜けたコンコースに、ブルーの自動販売機がある。一見普通のドリンクの自動販売機だが、実は、大気中のCO2(二酸化炭素)を吸収する、未来型の自動販売機なのだ。

従来の自動販売機は、周辺の大気を吸い込んで、なかの商品を冷やす、温める機能として活用している。コンコースに設置されている自動販売機は、庫内にCO2を吸収する特殊な吸収材を搭載。大気中のCO2だけを吸収する仕組みを備えている。まさに大気中の「CO2を食べる」自販機である。

１台あたりのCO2の年間吸収量は、稼働電力由来のCO2排出量の最大20%を見込んでおり、樹齢56-60年の杉に置き換えると、約20本もの年間吸収量に相当するという。2024年から本格展開される予定で、今大会の競技場コンコースで、観客やパラアスリートにお披露目されている。

吸収したCO2は、企業や自治体などとともに肥料やコンクリートなどの原料として活用される予定だ。今後、「CO2を食べる自販機」は、順次日本全国に展開されていく。街中やスタジアムなどに設置された自販機が、まるで樹木のようにCO2を吸収してくれる未来が、神戸2024世界パラ陸上の競技場から広まっていくことになる。

■ メッセージを描いたうちわで選手を応援しよう

川崎重工業は、船舶やエネルギープラント、産業用設備を展開するグローバル企業だが、Kawasakiのロゴとともにモーターサイクルのメーカーとしても世界中から親しまれている。本社が兵庫県神戸市にあり、神戸2024世界パラ陸上の基本理念である「つなげる、ひろげる、すすめる」に賛同、大会を盛り上げる応援企画を展開中だ。

競技場のメダルプラザ周辺には川崎重工業のブースも設置されており、小さい子ども連れのファミリーが連日集まっている。応援グッズとして丸いうちわが配布され、無地の裏面に応援メッセージを書き込むなど、オリジナルうちわを作ることができるのだ。

このうちわは、川崎重工業の特例子会社である川重ハートフルサービスの従業員が製作したもの。川重ハートフルサービスには、多くの障がい者が就業しており、業務として家庭から出た使用済みの牛乳パックや酒パックを回収して、それらを原料にリサイクルペーパーの製品を製作している。主な製品としては、名刺や賞状などがあるが、今大会に合わせて、オリジナルのうちわが完成した。

ブースでは、実際に子どもたちが障がいのある職員とともに、シールを貼ったり、用意されているカラフルなペンを使って好きな絵を自由に描いたり、自分だけのオリジナル応援うちわを作っている。出来上がったうちわは、もちろんスタジアムで選手を応援したり、うちわとして活用したり、今大会の記念として持ち帰ることができる。

また、ブースでは、障がいのある人も安定して楽しめるKAWASAKI製の電動3輪ビークル”noslis”も展示され、実際に試乗することができる。障がいのある、なしに関係なく、誰もがともに活躍できる社会の実現へ。神戸2024世界パラ陸上の会場で、楽しみながら体感してほしい。